

しろねこフレンズ

RASN\_Pixiv1本になります

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

白猫プロジェクトの冒険家達がジャパリパークに!?どったんばったん大騒ぎ?!

(2017年8月16日の作者誕生日に書いたものです、色々追加要素あるかもです。)

# 目次

序章	1
遭遇	13
悪夢とたーのしー!	25
PPPと赤髪	38
ヘラジカと赤髪	49
料理と再会	55
先輩と相談	66
お別れと変化	73
山頂と光	81
帰還とお祭り	93



## 序章

ここは飛行島じゃなく島興しやらでガシャドクロやら覆面騒動とかとか色々あったオバケの島。

近頃はどうか客足が捗り盛況であり、その一因には飛行島のメンバーが関わっていたのだった。

そんな島の山の一つにいくつかの人の姿があつたのだった。

「こういう木漏れ日を浴びながら紋章を描くのも中々良いもんだ…。」

「…。」

一人は紋章画家のユキムラでありもう一人はRASN（赤髪だけどアデルじゃない方で最初から実は光れたかもってという主人公君。）であり、両者ともに筆とスケッチブック片手に紋章を描いていた。

「そーですねー解放感たっぷりで、しゅどーっと来てますよー！」

近くにはユキムラ同様に紋章画家のイロメロもおり彼女は筆は持たずに指で描いていたのだった。

「しゅどーつとね…楽しくやってるな。」

「……?」

「ん? 楽しいき。なんせお絵描きは楽しく、だからな?」

「はいっ! そうですよ、シユツと描いてパツと! …びゅおー?」

イロメロが丁度一枚描き終えるとその紙がパタパタと揺れる風が吹き抜けた。

「あつー! みつけたー!」

そして風に乗って声がするとそこには嵐の鳥と奉られていた霊鳥の少女のエクルが草むらを風で押し退けてやって来ていた。

「……」

「ぎゅー! ナイスきやつちー!」

そしてRASNはエクルを認識して画材をまとめて置くと飛びかかってきたエクルを受け止めたのだった。

「こつちかおー?」

「そうみたいで…なっ?!」

エクルがやって来ていた方向からはカモメとメグがやって来ており、カモメはギョつと驚いていたのだった。

「ん? どうした?」

「なっ…なんでもありません！」

「お三人方はどうしたんですかー？何か用ですー？」

「んつとね、えつーとじゅんびが…なんだっけー？」

エクルは口に手を当てて空を仰ぎ見ながら何かを言おうとしたがすぐに首を傾げたのだった。

「おいおい…。」

「ん…でもけーきが…むきゅ?!」

「おっと、こつから先はメグたんにお任せだおー。」

するとメグはエクルの口に野菜チップスを一枚詰め込むと三人へと説明を始めた、なおエクルは野菜チップスを満悦な表情でポリポリとしていた。

「まだ食材が届いていない感じか、結構描いていたとは思ったんだが…。」

「…！」

「でももつと沢山描けるってことですね！」

三人へと伝えられたのはロツジにへと届けられる食材が未だに着いていないという事であった、ちなみに彼等が山中にて描いていた理由は到着するまでの時間潰しという感じであった。

「…？」

「到着予定でありますか？キャトラ航海士からはあまり期待しない方がって言われてます…。」

「だから他のみんなは釣りとか採集をしてるおー、シャルたんも飛べるのを引き連れて買い出しにいってるおー。」

「…！」

「あー、それは大丈夫だお。それよりこの山の山頂は眺めが良いから行って見ないかお？」

「そうだな、そこなら良いのが描けそうだしな。」

「それでは参りましょう！」

「…!？」

ロツジの方にへと足を向けようとしたRASNにメグは立ち塞がり、カモメはRASNの腕を引っ張ったのだった。

— 山頂 —

「すうう…：…空気が澄んでますねー？」

「ああ、眺めも良くて筆がよく進むよ。」



山頂に着いた一行は島をほぼ見渡せる山頂に着いていた、ユキムラは早速折り畳み椅子に腰を掛けて画材を取り出して二三枚描き上げたのだった。

「わー！面白そー！エクルもするー！」

「それじゃー！一緒に描きましょう！」

「わーい!!」

エクルはイロメロと共に指を色付けて紋章を描き始めた。

「……？」

「メグたんは大丈夫だお、こうやって見るだけでも十分に面白いおー。」

「私もですよ。」

そして残った三人はそれらを座って眺めていたのだった。

「カモメたん的にはRASNたんと一緒にだからじゃないお？」

「えっ……!? まあ……それでもありますけど……。」

「……？」

「RASN! RASN! ……みてみてー! 私ももんしよー描けたよ!」

するとRASNらの方にへとエクルが紋章が描かれた紙を突き付けてやって来たのだった。

「……!」

「おー…何とも言いがたい感じだおー…。」

「でも何かいいですね!」

「えへへー、ありがとう!」

エクルは誉められてかルンロンと飛び跳ねていたのであった。

「エクルちゃんはすごいですよ!お陰様でこんなすごいものも描けましたしー!」

その後方ではイロメロが大きなキャンパスに文字の様な紋章を描いていたのだった。

「へえー…文字ベースで…しかも一部がアンシンメトリーで…やっぱりすごいな。」

「はいっ!よくわかりませんがそんな感じですよ!」

「どんな感じかおー?」

「エクルも見る見るー!」

「…!」

「そうですね!見に行きましょう!」

そうしてイロメロの元にへと続々と集まっていた。

「きやつ。」

だが勢い良く来ていたエクルはイロメロにぶつかってしまい絵の具がほんの少しだ

けはねてイロメロが描いた紋章の文字の様なところについてしまったのだった。

「わあ!?!ごっつ…ごめんなさい…。」

「大丈夫だよー、それにこう耳がピヨコンとした感じで可愛いですよー?。」

イロメロは申し訳なきそうに謝るエクルにっこりと微笑んでいた。

「まあ…そうだな、…ん?。」

「んむ?どーしたお、ユキたん?。」

「いや、あそこの草むらに何か…?というかなんだユキたんって?まるで女の子じゃないか…。」

「でもユキムラさんは髪が長いですから結んだら面白そうですね!。」

「髪が長いのは確かだが面白そうとは…って何してるんだ?。」

「んー、ツインテールも中々だけどお団子も面白そうだよー。」

メグはいつの間にかユキムラの背後を取って髪をツインテールにへと結び上げていたのだった。

「あははーおもしろそー!。」

「私もしたいですー!。」

「やめろオ!人の髪で遊ぶなー!。」

そうしてユキムラは三人に次々と髪を弄くられていたのだった。

一方蚊帳の外の二人はユキムラの見ていた草むらの方にへと足を運んでいた。

「どうですか？」

「……！」

「こつちもですねー…気のせいなのでしょうか…？」

「……？」

二人は首をかしげて只今頭に羽根がちよこんと生えてるような髪型にさせられたユキムラらの所に行っていた。

「RASN、どうだった…!？」

「……！」

「そうか、何もないか…いい加減にしてくれ…！」

「むっー…」

「ユキムラさんの髪ってツヤツヤしてますねー。」

「道具があればもつと遊べたおー…。」

ユキムラはその髪型のまま取り付いていた三人を追い払った。

「…つたく…ん？」

結ばれた髪をほどこうとしたが途中でその手は止まってしまったのだった。

「今度は何だお？」

「イロメロ…！お前の持つてる紋章…！」

「んんー？わあー！ぴかぴかです！」

イロメロがさつきまで描いた紋章は虹色の光を発しており、みんなはイロメロの方へと集まっていた。

「なんだろなんだろー?!」

「…でも綺麗ですね！」

「…！」

「イロメロ、何かしたのか？」

「特にはなにもですけど…どれも楽しそうでバビューンとしますよー！」

「んお？」

紋章の光に目を奪われてる中メグはそり立つ耳をピクンとして、先程ユキムラが見てRASUNとカモメが調べに行った草むらの方にへと視線を合わせたのだった。

「あれは…星たぬき…じゃないし…なんだお？」

そんな視線の先には草むらに紛れて青色の突起物がゆらゆらと揺らいでいたのだった。メグは下唇と少し上げて一歩二歩と歩み寄ろうとしていたが。

「んお?!」

「どうした!?!うわっ!?!」

「なんですかー？うわあー！」

「…!？」

「きやあ!？」

「わーい！」

次の瞬間光っていた紋章が辺りを包む様に光輝いた、そしてそれに飲み込まれた六人はその場からいなくなっていたのであった。

しかしイロメロの描いた紋章紙のみは残って落ちていったが先程から草むらにいたモノに乗ったのだった。

「わーい！」

「あんまり走ると危ないよ？」

夕刻の草原を行く二つの人の姿がり、一つは跳ねていたりしておりもう一つはそれを歩いて追いかけていた。

「へーきへーき！それに風が気持ちいいからー！」

「あははは…あれ？」

「どうしたの？」

「あれ…流れ星かな？」

「んー？…あつ！ほんとだー！すごい！いっぱいだー！」

「そうだね、1…2…3…6つもあるね？」

「そうやって空を見ると6つの流れ星は3組になるようにまとまり散らばったのだつた。」

「あー…消えちゃった…。」

「でも綺麗だったね？」

「そうだね！きらきらしててサンドスターみたいだったよ！」

「うん。それより早く行こっか、そろそろ暗くなってきたし寢床を探さないとね？」

「そうだね！かばんちゃん！」

そうして二人はまた前へと進み始めた。

「マツママママママ……」

途中かばんちゃんの腕に付けられていた機械の様なものピコピコと緑色に光ると少しノイズが走っている電子音が小さく鳴ったのであった。

「ロツ…ロロロ…クメイサマ…マツママママママ…ヨツ…ヨヨヨ…ヨウコソ…ジャパリパークへエ……。」

「うみや？」

「どうしたのサーバルちゃん？」

「ううんー、なんでもないよー！」



## 遭遇

ここはジャパリパーク……そこはとてつもなく巨大規模な動物園であり、園内にはサンドスターと言う謎のエネルギーにより動物らの人化形態とも言えるフレンズ化が行き渡っていた。(しかも女の子となるのである。「恐らく」) そんなジャパリパーク内にはいくつものちほーがあるのであった。

そしてここはみずべちほーであり水が豊かな所でありステージが存在する場所であり、その近くの小屋から五つの人影が続々と出てきたのだった。

「ふいー今日も疲れたぜー。」

「もう辺りが暗いですね。」

「おなかすいたー……。」

出てきた五人はそれぞれジャージの様なものを羽織ったり着たりしていたりスカートをはいたりはいていなかったり靴の色が違ったりしていた。

「お疲れ様！今日は中々良かったじゃない！」

「そうだな、だがあの時のジャパリまんを借りる時に比べれば……。」

黒髪で赤色が一筋入った髪をして他と比べハイレグが目に行く格好をしたフレんズのコウテイペンギンは白眼を向いて固まっていたのであった。

「つて！コウテイまた自分で言つて気絶してるじゃねえか！」

そう言つて突つ込むのは黒色の髪に黄色く触角の様に上がつてるとツインテールの様にサイドから下がる黄色い髪に、前髪の一部が赤色となつているフレんズのイワトビペンギンもといイワビーであつた。

「またですか…おや、フルルさん？」

そう言うのは黒のロングヘアで前髪が一部黄色くなつた見た目でとても大人しく見えるフレんズのジェンツーパーペンギンもといジェーンである。

そしてジェーンがフルルと呼ぶのはフンボルトペンギンのフレんズであり黒色と前髪の一部がピンク色の髪をしていた、そんなフルルは半開きの口を夜空に傾けていた。

「どうしたのフルル？」

心配そうに寄つたフレんズは白黒のツインテールに前髪から出てる黄色い触角の様な髪にフルルの様に前髪の一部がピンク色であるロイヤルペンギンもといプリンセスであつた。

そしてだが彼女ら五人はPPP（ペパプ）と言う名のアイドルユニットなのである。

「あれー…。」

気が抜けた声でフルルは夜空を指し、コウテイ以外のフレンズはそれにつられて夜空を見た。そこには満天の星が輝いていたのだった。

「おっー！すげー！」

「きらきらしておいしそーだよねー？」

「流星に食べることは出来ないわよ…。」

「ですけど…綺麗ですね。」

各々が反応をする中でキラリと流れ星が四人の目に止まった。

「おっ！流れ星だぜ！ロックだぜ！」

「ロック…なのでしょうか…？」

「ふわああ…。」

「…でも何か随分と長く流れるわね…あの星？」

「そうですね…それに何か大きく…。」

「まさか、落ちては来ねえよな…まあ向きは違うけど…なあ?!」

そうするとズドンと響く音と共に流れ星は勢いをつけて落ちてきたのだった。

「わああ?!本当に落ちてきたー?!」

「……………うっ……………」

「あぁっ?! コウテイさんが!？」

「オイオイ大丈夫か?! ってフルル!？」

「私見に行ってくるねー。」

そして落ちてきた衝撃のせいか辺りは少し揺れて気絶をしていたコウテイはそのまま倒れてしまい、フルルは落ちていった方にへと走り出したのであった。

「あの娘は相変わらさず……! ジェーンはコウテイを見てて! 私とイワビーでフルルを追うわよ!」

「おうっ!」

「分かりました! んー……!」

そうしてプリンセスはイワビーと共にフルルが走っていった方にへと走り、ジェーンは倒れたコウテイの介抱をしていたのだった。

そしてその頃その流れ星が落ちていた地点は草原と森林地帯の丁度真ん中ぐらいでそこには穴が開いていた、そんな中には誰もおらず穴の側の草の上に R A S N は寝そ

べっていたのだった。

「……………」。

「……かなー？」

ガサガサと草木が靡くとフルルが飛び出してやってきたのであった。

「すごい大きな穴……あつ……。」

フルルはまずは目の前の穴に驚いて中を覗こうとしたが穴の側にある影を見てそちらにへと近寄った。

「んん？んん……寝ちやつてるのかなー？」

フルルは一回辺りを見渡してから膝を抱える体勢で R A S N の頬や腹を手で優しく揺すつたのだった。

「起きないね……でもそこ気持ちよさそ……ふああ……おやす……。」

「おーい！フルルー！」

「んあ？イワビー？」

欠伸もして R A S N の横にへと膝をつこうとしたがイワビーが声と共に飛び出てやってきて、後ろからは肩で息をするプリンセスも来ていた。

「ようやく見つけたぜ！てかすげー穴だな！」

「そうでしょー？これもフルルが見つけたんだー？」

そう言うてにつこりと笑いながら寝ているRASNを指差したのだった。

「こいつは…?」

「んー…分かんないかなー、プリンセスは分かる?」

息を調べ終わったプリンセスは姿勢を低くしてRASNに触れた、そして頭を少し動かしたり背中の方を見たりのだった。

「尻尾は…ないし、フードや羽とかもないし…なんなのかしら…?」

「特徴がないって感じか?」

「そうね…見えないってこともあるかもしれないけどこれじゃまるで…。」

「ねえねえ、あれあれー。」

「何だ…うおっセルリアン!」

そうすると彼女らの前には青く丸いブヨブヨとしたモノがおりセルリアンと呼ぶそれには一つの目と耳のような突起物が生えていて、こちらにへと近づいていたのであった。

「何時の間に!」

「でも一匹ぐらいなら…!うおっ?!」

イワビーはセルリアンの前に立ち両手を前に構えようとしたがグラツとイワビーは体勢を崩したのだった。

「何だ…フルル?!」

そしてイワビーの前にはフルルが飛び上がっておりセルリアンの上を取っていた。

そんなセルリアンは上のフルルには気付かずただ前に進んでいたのだった。

「ええーい。」

フルルはそのまま落ちながらもセルリアンの後ろにある固い部分を叩き割って着地したのであった、そしてセルリアンはそれにより青く幾つものキューブ状のモノにへとばっかーんと弾けて変わったのだった。

「背中ありがとねー? イワビー。」

「別に良いって! それよりスゲーなフルル!」

「そんなことないよーやる時にはやるよー?」

「出来たらそれをステージで何時でも…。!? みんなまたよ!」

プリンセスがそう言うのと草木の影からまたセルリアンが飛び出してきた。

「また来やがった! 今度はアタシが…!」

イワビーは目を細めるとまた両手を前に構えた。

「ええ…。」

だが直ぐ様その手は奥の方からわらわらのとやって来るセルリアンらを見て下ろし

たのだった。

「これはヤバイわね…逃げるしかないわよ！」

「でもー囲まれてるよー？」

「ええ?!」

フルルの言う通りにイワビーの反対側にもセルリアンが沢山いたのであった。

「どうしてこんなに…?!」

「一対一ならともかくこの数は…！」

「うわあー…来るよー…。」

沢山のセルリアンはズイズイと彼女らににじり寄り、緑色の部分もかなり少なくなっていた。

「……までなの…?!」

「くっ…！」

「わあ…！」

そして一匹のセルリアンが飛びかかろうとしてきたのだった、だが次の瞬間飛びかかろうとしてきたセルリアンは倒されなのであった。

「今度は何っ?!」

プリンセスが倒されたセルリアンの残骸の先にある人影を見ていた、長い髪とヘラ状



に広がった角が特徴的な影であった。

「うむ、ハシビロコウここであっているな？」

そして影がそう叫ぶと空から灰色の探検服とタイツを身にまとった女の子が降り立った。

彼女の髪は灰色の髪で上に何本か立っており左右に翼の様に流してある髪先は黒くなり、灰色の脇に黄色く結った髪が特徴的である。しかしその中でも前髪に少し隠れている目がまるで睨んでいるかのようなのが一番な印象ではあるが。

「うん……そうだよ。それにみんなもこっちに向かつてるよ。」

「そうか、まあこの数なら私一人でも……」

「とりあえず遠いのを誘導してくるね。」

「分かったぞ！」

そうするとハシビロコウは黒くなってる髪の毛部分が羽ばたいて空を飛んでいったのだった。

「さてと……やあやあやあ！私はヘラジカ！セルリアン共！いざ尋常に勝負っー！」

そして自らヘラジカと名乗る女の子は角の様な物と同じ穂先の槍を振り回してセルリアンを倒し始めたのであった。

「あれって……ヘラジカさんね……助かったわ……。」

「ああ！取りあえずこの場から離れようぜ！」

「あーい。」

そうして彼女らは倒れてるRASNを背負ってその場から離れようとしていた、しかしセルリアンもそれを逃がさないのか追っかけようとしていた。

「させんぞ！うおおおお！！」

それに対しヘラジカは雄叫びと軽い地響きを起こしながらもRASNらの所へと行くセルリアンを撃退していた、だが全部を倒しきれなかったのか数体がヘラジカに襲いかかろうとしていた。

「危ないっ!!」

「ふっ、大丈夫だ…。」

するとそのセルリアンはぱっかーんと弾けて軽い足音と重々しい足音が響いたのだった。

「ヘラジカ様！大丈夫でござるか！」

「うむ、大丈夫だぞカメレオンにシロサイ。それによく来てくれた！」

足音の方には甲冑を着込んでサイを模したような槍を持ったクリーム色のふんわりとした感じのポニーテールの子と、深緑色でまるで忍者の様な格好のセーラー服の様な服装をしており緑色の垂れているポニーテールと尻尾も特徴的な子が立っていたの

だった。

「そちらは…ペパプの方々に、そちらは誰ですの？」

「まあ何はともあれまずはここから引くぞ、私が引き付けるからカメレオンにシロサイは彼女らを守ってくれ！」

「了解しましたわ！」

「御意でござる！」

そうしてヘラジカがセルリアンを蹴散らしシロサイとカメレオンは近寄るセルリアンを追い払い空のハシビロコウとも合流を遂げてからみずべちほーにへと退避できたのであった。

「中々にしづとかったですわ…！」

「うむ、ここまでしつこくつきまとわれたのは初めてだな…。」

ヘラジカやカメレオンらはライブステージにへと腰を掛けており、ジェーンが饅頭のような食べ物であるジャパリまんを幾つか持ってきていたのだった。

「大変でしたのね…ジャパリまんをどうぞ。」

「かたじけないでござる…はむはむ…。」

「ところでどうしますか？ここからへいげんちほーには結構時間がかかりますし…。」

「うむ、それだがプリンセスと相談して一晩ここで泊まることにした。」

「そうですか、それではゆっくりしていったくださいね。」  
そうしてジャパリパークの夜は更けていった。

## 悪夢とたーのしー！

「うっ…。」

ユキムラは目を覚ました、眼前にへと広がるのは星空であったのだった。

「ここは…う…みんなもいる…。」

そして体を起こして辺りを見渡した、そこは先程まで髪を弄くられていた場所であり髪は元通りになっており回りにはイロメロやRASNやエクル達がうつ伏せになっていた。

「もう夜なのか…時間稼ぎのつもりがとんでもない事に…おいっ！みんな起きろ！」

ユキムラはうつ伏せとなつている皆を揺すったり声をかけたりしたが皆は起き上がるどころかピクリとも反応が無かったのだった。

「ユキムラアーそんなことしても無駄無駄ー。」

「…!?その声…！もしかして…アイザック?!」

声の方を見ると闇夜から姿を現したのはイロメロ兄でもありユキムラの親友でもあり同じ紋章画家であった男がそこにいたのだった。

「そーだ、どうした？そんな驚いた顔をしてよお？」

「そりゃ…お前は死んだはずじゃ?!」

「フツフツ…生き返ったんだよ…お前七夕に俺のことを書いてくれたろ?それが叶ったかもなあ?」

「そつ…そうなのか…?」

「ああ……。つて、んなわにやねーだろー!ばあか!!俺様がお前ごときのお願いだけで生き返るわきやねーだろーがよお!!ハッハハハ!!」

アイザックはそう高笑いを上げたのであった。

「…相変わらずか…でも本当に生き返ったんだな…!」

「ああ…それなんだがな、そりゃ嘘だ。正確には完全には生き返つちやいねえんだよなあ?」

キツパリそう言つてアイザックは自身の足元を指した、ユキムラがそこにへと視線を送るとアイザックの体は膝から下が無かったのだった。

「それでだユキムラ、親友であるお前に頼みがあるんだ。お前の手伝いがあれば俺は生き返れるんだ…。」

「そつ…そうなのか…俺でよかつたら手伝うが…。」

「お前ならそう言うと思つてたぜ、そんじゃ…お前の目を寄越せ。」

「……アイザック…?」

そう言われたユキムラは腹に何か重いものを受けた感覚を覚えたのだった。

「何、信じらんない！つて顔してんだ？目を寄越せつて言ったんだよ？」

「いや、それは聞こえたんだが…何で俺の目なんかを…!？」

「んあ？まあ完全復活にはどうやら自分の親しい人物の何かを代わりに差し出さないと  
いけなくてな…。」

そう言いつつアイザックは一步一步とユキムラへと近づいていた。

「それで可愛い妹に頼むのは可愛そうだね、それで親友でもあるお前ならとな…。」

「…!？」

ユキムラはギロツと睨み付けられると腰が抜けたのか尻餅を着いてしまったのだった。

「おっ、わざわざ取り易いようにしてくれたのか？ユキムラは相変わらず気が回るよ  
なあー？」

「ちつ違うつ！それにまだ俺は了承はして…んぐつ!？」

するとユキムラの背後から手が延びて一本は口に後の二本はユキムラ羽交い締め  
したのであった。

「(なんだ…?!…あつ…アイザック?!)」

口を封じられたユキムラの視界に入ったのはアイザックだった、しかしその体はイロ

メロやRASNの体であり顔だけはアイザックなのだった。

「んぐぐぐー!?!」

そうしていると倒れていたメグやエクル等も立ち上がってユキムラの動きを封じに  
来た、そしてそれらの顔もアイザックなのであった。

「(なっ…なんなんだっ!?!)」

「さあーで、そろそろ頂くかな? 親友よ。」

「(やめろオ!!)」

「ユキムラア! お前は俺にとつての…おっとこれ以上はいかな。」

「(うおおおおおああああああああ!!?!?)」

アイザックはそう言いかけてユキムラの右目にへと指を差し込んだ、ユキムラは必死  
に暴れて声を上げようとしたがアイザック顔のイロメロらに体も口も封じられている  
のである。

「(………!!………!!)」

そして右が黒く見えてしまうようになったユキムラは項垂れ声にならぬ声を上げた  
かった、だがそれは許されず自分の右手をジツと見つめるアイザックを見させられたの  
だった。

「へえー…やっぱ綺麗な目だな、ユキムラー?」



「……………」

「さてと…もう一個もだな、チクツと痛いかもなー？ハツハハハ!!」

そうしてユキムラの左目にも手袋が赤くなっているアイザックの手が延びようとして……。

「うおおおおお!!?!」

するとユキムラは大声を上げて起き上がったのだった。

「ハア…!!ハア…!!ハア…!!ゆっ…夢か…?!」

まずはと汗を垂らす額を拭い去りそのまま下に動かしてあるということをユキムラは確認したのだった。

「よかった……。…?!」

天を仰ぎ見て日光を目蓋に感じさせたが辺りを見渡し、ユキムラは当惑したのだった。

「どういふことだ…、ここは…?」

ユキムラの辺りは山頂などではなく木々から蔦が垂れてジメつとした感触が広がる。ジャングルの様な所であり、ユキムラの下には木の板が敷かれていたのだった。

「おっ? 声が出たと思っただらお目覚めかい?」

「…!?!」

足音の方を見るとそこにはツリ目で白いワイシャツと豹柄のスカートやニーソックス等を身につけていた女の子がいた、そしてユキムラその子の身格好よりも頭から生えている二対の耳と後ろでチラチラと見える尻尾に目が行っていた。

「どうしたんだい、もしかしてまだ具合が悪いとか?」

「いや、大丈夫だ。それより君は…?」

「私かい? 私はジャガーだ、よろしくね。」

「ああ、よろしく…ユキムラだ。」

ユキムラはまだ少し落ち着かない素振りですジャガーの差し出していた手を握り返したのだった。

「ユキムラ…一体なんのフレンズなんだい? 見た感じ羽みたいなのがあるから鳥かな…。」

「いや待て…どうして?」

「いやだつてさ、その頭がさ。」

「ん……?……ああ……?!」

ジャガーに言われさわさわと自分の頭を撫でた、そして思い出したかのように叫ぶとわしやわしやと髪をとかして元のストレートな感じにへと戻したのだった。

「急にどうしたんだ?」

「いや……何でもない……何でもないんだ……そういえばここは一体どこなんだ?」

「ここかい?ここはじゃんぐるちほーでね、おっとそうだ済まないけど歩き……いや泳ぎながらでいい?」

「泳ぐ?」

そうしてジャガーに連れていかれユキムラはじゃんぐるちほーの大きい川にへと着いた。

「それじゃこれに乗つといてくれよ。よつと。」

ジャガーは川へと体を沈めて近くに浮かんでいたイカダの様なものを掴むとユキムラの方にへと寄せたのだった。

「大丈夫なのか?」

「へーきへーき、これぐらい何時もやってるしあの時に比べれば大丈夫だつて。」

「……まあ、それなら失礼するが。」

そうしてユキムラはイカダに座り乗るとジャガーがそれを引いて川を進んでいった

のだった。

「なあ、すまないがさっきあの時って言うていたがどんな時だったんだ？」

「ん？ああそれなら昨日の夜に凄い音が川でしてね、それで見に行ったらユキムラが浮かんでいたってわけさ。」

「…そうなのかそんな事が、助かったよジャガー。」

「礼なんかいいって。」

「…そうだ！俺以外にも誰かいなかったか!?こう…ピンク色の髪や赤い髪のか…！」

「まあまあ、落ち着いて。赤いのはともかくピンク色の子ならユキムラと一緒に助けたよ、今その子の所に向かっているから大人しく待つてるんだよ。」

「わっ…分かった…。」

そうしてジャガーは川を上がって行き、着いたのは橋の残骸のような物が川の中にある場所であった。

「到着ー、多分この辺りにいるんだろうけど…。」

「おーい！イロメロー！」

二人は陸地にへと足を付けると辺りを見渡したが人の影すら見当たらないのだった。

「あれー？何時もならここで楽しそうに遊んでいるんだけどなー…？」  
「イロメロー！イロっ…!？」

ジャガーが頭を掻きながら更に探しており、ユキムラは川の方に視線を向けて制止してしまつたのだった。

その先にはアイザック…ではなく崩れた橋の残骸のような影からとんとんと何者かが残骸の天辺にへと歩いていたのだった。

「ふうー！とーちやーく！はやくはやくー！」

「わーい！まっつてくださーい！」

「…!?イロメロ!？」

そしてそんな子の隣にはイロメロも笑顔でとんとんと上がってきており何故か水着姿なのだった。

「いっせーのせー、でいきましよう！」

「わかつたー！いっせーの…！」

「せー！」

そうして彼女らは座るとズサーと残骸の斜面を滑り始めたのだった。

「わーい！たーのしー！」

「たーのしー！ですー！」

「……………」

ユキムラはそれを口を半開きで見るとは思わなかった、そしてザブンと彼女らは川にへと入っていった。

「おっ? 見つかったかい?」

「……………」

「…? おーい? ユキムラー?」

ジャガーの問い掛けにユキムラは無反応でまだ残骸の方を見ていた、するとまた上へとイロメロらがとうちやくしておりまたすわりすべりはじめたのだった。

「わーい!」

「たーのしー!」

「あはははー… たっ… たーのしー…。」

「おっ… おい?! ユキムラ!」

するとユキムラからボソツとかのじよらのいつていた事をつぶやきはじめてジャガーはそんなユキムラのかたをゆきゆきした。

「ふう! あっ! ジャガーちゃん! おーい!!」

「おっ? カワウソ、そんなとこにいたの。」

「いたよー! おっ? 起きたの? 起きたの?!」

……ジャガーからカワウソと呼ばれた子は興味深そうにユキムラを見ていた。

「ああ、それでそっちの子に用事があるみたいだよ。」

「そーなの？イロメロちゃん、呼ばれてるよー？」

「はーいっ！あつ、ジャガーさんお久しぶりで……あつー！ユキムラさん起きたんですねー？」

「……………んはっ?!イロメロ！」

ユキムラはガクンと体を揺るがして目を見開いたのだった、そしてイロメロとカワウソはバシヤバシヤとこちらへと泳ぎ上陸したのであった。

「ぶるるるう!!たのしかったね、イロメロちゃん！」

「そうですねー!ぶるるるんん!!とつてもたーのしーでしたよー!!」

カワウソは上がってから体を震わせて体の水を取り払っており、イロメロもそれを真似てか体を震わせていた。

「イロメロ……一ついいか？」

「なんですか？」

「ここはどこだかとか分かるか……？」

「分かりますよー!カワウソちゃんと一緒に遊んでいるときに色んな事を色んな人から聞いてきたから安心してください!エツヘン！」

胸を張り自信満々なイロメロはユキムラにへと色々なことをユキムラにへと伝えた。

「成る程…ジャパリパークと言うのか…聞いたこと無いところだな…。」

「私もです!でも色んなところの自然がどばーんつとあつてバシヨーン!ですよ!」

「そつ…そうなのか…とところでジャガーにカワウソ、俺たち以外に他に誰かいなかったりしなかったか?」

「うーん…昨日の夜に凄い音がしてから浮かんでいたのは二人だけだったし…。」

「昨日の夜つていったら音もすごかったけど空に流れ星がバツ…つてあつちの方にもしてたねー!」

カワウソは楽しそうに言いながら高く高くそびえ立っている山の方にへと指差したのであった。

「そういえばそうだったけ、あつちは…みずべちほーの方かな。」

「となると、そのみずべちほーに行つた方がいいな…戻り方よりまずは合流をしてからだな。」

「そーですね!RASNさんのぴっかぴっかーならどうにかなると思えますしね!」



「あの山を越えるのかい？」

「ああ、きつと仲間がそこにいると思うからな。世話になったな。」

「仲間が見つかるといいね。」

「じゃーねー！」

そうしてユキムラとイロメロは二人に別れを告げて山の方にへと向かったのだった。

「にしても…似てたな…。」

「似てたつてもしかしてかばんちゃんにー？」

「まあ…そうかな、でもあのユキムラつてのはなんか少し違うような…そうでもないよ  
うな…全然わからん…。」

「うーん…難しいのはよくわかんないし、とりあえず遊ばー？」

「分かった分かったつて。」

## PPPと赤髪

一方その頃な同時刻ぐらいの時…。

— みずべちほ —

「ふああ…おーすつ。」

ペチペチと足音を立ててやって来ていたのはイワビーであった。

「あつ、やっと来ましたか遅かったですね。」

「見た感じだとさつきまで寝ていたのか？」

「そうなんだよ…いつもならフルルが起こしてくれただけだよ、何でか今朝は来てくれなかつ…ふああ…。」

「そういうえばフルルはまだ来てないわね…てつきりイワビーと一緒に来ると思ったんだけど…。」

「そういういやいねーな…むにやむにや…。」

「イワビーさん、寝ないで取り合えず探しましょう。」

「うい…。」

そうしてペパプの四人は手分けしてフルルを探すこととなったのだった。

「フルルー！ジャパリまんあげるから出ておいでー!？」

プリンセスはジャパリまん片手に周囲を練り歩いて声を上げていた。

「ん…、こっこつてたしか…。」

そして彼女はとある扉の前にて足を止めてその前へと立ったのであった。

「まさかね…失礼する…わ…。」

ガチャリと扉を開いて中に踏み入りポトリとジャパリまんを落としてしまったのであった。

「わっ…わわわっ…なっ…ななな…!？」

「……………じっ…。」

「くう…くう…じゃぱりまあん…もっとおー…。」

「何してんよおおおおお!?」

みずべちほーにプリンセスの叫声が響き渡たり、ドタドタと騒がしい音が三つ寄ってきたのであった。

「どうしたんだ!?!プリンセス!?!」

「とてもすごい声でしたけど、もしかしてフルルが…。」

「私も驚いたぞ！それと道中でこんなものも…。」

「……………」 (白目)

ヘラジカが持ってきたのは気絶していたコウテイなのであった。

「…おっ！フルルこんなところにいたのかよー。」

「本当ですね、気持ち良さそうに…。」

「んん…？どうしたのみんなー？おはよー…。」

するとフルルは目を擦りながら生欠伸で皆を見たのであった。

「おう！よく寝れたかフルル？」

「んあー…んおー？」

するとプリンセスはズカズカと歩くとフルルの肩を掴むと床にへと正座させたのだった。

「フルル…取り合えず寝坊していたことはともかくとして何でこんなところにいたの？自分の部屋があつたでしょ？」

「んー…暖かいからかなー？」

「あつ…暖かいっ!？」

「フルルさんは寒いところが少し苦手ですからね、以前寝ている時にも潜り込んで来ましたからね…。」

「そうだな！こつちもよくやられてるけど…。」

「そうじゃなくて！どうしてここの部屋なのって聞いているのよー!?それにあなたも何で止めたりしなかったの?!」

プリンセスはわーきやーと椅子に座ってじつーとこちらを見ていているハシビロコウに声をかけたのであった。

「……………ごめんなさい、少し寝ちゃってて…起きたらこうなって…起こそうにも機を伺って中々…。」

「うっ……………分かったわよごめんなさい…って?!フルルー!?!」

「…んむにや…。」

「…じつー……………」

そうしてフルルはまたベッドにへと潜り寝ているRASNの隣に戻ってまたまたみずべちほーにプリンセスの叫声が響き渡ったのだった。

そしてまたフルルは起こされて正座させられプリンセスの説教を受けたのであった。

「…分かった?」

「分かったよおー…。」

「分かればいいのよ！それじゃレッスンをしにいきま…あっ!」

今度は指差ししながらプリンセスは叫声ではない声を上げた、指先にはベッドの上で上体を起こし体を伸ばすRASNがいたのであった。

「おお！ようやく起きてくれたか…！」

「…!?…?!」

起きたRASNまずは辺りを囲い見てくる六人と白目の一人を見てオロオロとしていたのだった。

「どうされましたか？もしやまだ具合が…。」

「あんま無理すんじやねーぞ？それとも腹減ってるのか？」

「お腹が空いてるならジャパリまんが…あれ？ない…あつ…。」

「あむあむ…ふおうひひやのぷりんせふー？」

「なんでもないわ…ジャパリまん取ってくるからみんなは先に行つててちようだい…。」

そうしてプリンセスは部屋から出ていった、残された面々はRASNを引き連れてステージの方にへと歩きカメレオンやシロサイらとも合流しコウテイも復活したのであった。

暫くして沢山のジャパリまんが入った袋をプリンセスは持つてきたのであった。

「はい、お待たせ。ヘラジカさん達もどうぞ？」

「忝ないでござるよ。」

「頂きますわよ！」

「うむ、腹が減っては戦は出来ぬしな…はむ…。」

「…がしがじ…じっ…。」

ヘラジカの面々もだがペパプの面々もジャパリまんを客席にて食べ始めたのであった。

「なあなあーこれ食べたらレツスンかー？」

「そうですね、その為にもしっかりと食べておきましょう？」

「プリンセス、貯蓄は大丈夫なのか？」

「大丈夫よ、今のところはフルルにも勘づかれてないからあの日までは大丈夫なはずよ。」

「どこにあるのー？」

「教えないわよ…あら…？」

楽しそうに食べる中RASNは渡されたジャパリまん片手に辺りをキョロキョロとしてジャパリまんはまん丸なままだった。

「どうされましたか？もしかしてまだ…。」

「…！（ブルブル）」

「えーつと…大丈夫ってこと？とか喋ったりは……。」

「ああ、それだけだよ。プリンセスが行ってから色々聞いてみたけど無口なんだよなー。身ぶり手振りとかで伝えてくれっから何となくは分かるけどさー。」

「だがフルルは何となく伝えたい事が分かるらしいがな。」

「そうなの？」

「そうだよー、ねえねえ食べないのー？」

そう言いつつフルルはRASNの手にあるジャパリまんを掴んだのだった。

「……。(汗)」

「んー…だったらこうしたらどうかなー？……はい、あーん。」

「…!？」

するとフルルはジャパリまんを取りパコツと半分に分けると片方をRASNへの口に近づけたのだった。

「……………、…!!」

グイグイと何度も押し付けられ観念したのかRASNは口を開きジャパリまん（ハーフ）を喉にへと通した、そしてRASNの頬は少しだけ上がったのであった。

「美味しかった？もう一個もどうか、あーん？」

そうしてRASNはフルルにもう一個のジャパリまん（ハーフ）を口へと運ばされた



のであった。

「あの二人なんか仲いいなー？」

「そうですね、あのフルルさんがこんなにも…プリンセスさん…?!」

「えっ…？どうかした？」

「…何でもない、それよりやはりあの赤髪は…？」

「ええ、尻尾も羽もないから…きつとかばんちゃんと同じ…。」

「でしたら会わせた方が…。」

「確かにそれも良いかもしれないけど…今は色々な所に向かっているからな…。」

「そうね、前はアリツカゲラさんのところに行くって言ったからね。」

「美味しかったー？」

「………！」

三人が喋りあう中フルルの手元のジャパリまんは無くなってにつこりとR A S Nに微笑んでいた。

「それじゃ食べたことだしレッスン行くわよー！」

「あいよー！」

「分かりました！」

「分かった。」

「はーい。」

「…!?!」

プリンセスはパチパチと手を叩き皆にへ声を届かせて、他の四人は返事をしてプリンセスについていった。しかしフルルだけは近くにいたRASNと手を繋いで向かっていったのだった。

「さて私たちももう少し見回るか。」

「そうですね、何故かセルリアンが多くなられますしね…。」

「御意でござる…。」

「…うん…。」

そうしてヘラジカからもステージから離れて辺りの警戒を再開したのであった。

「ううむ…。」

そして暫く経って、ジャパリパークを照らす太陽も高く高くなった頃…。

「いやーすげーな！おかげで今日のレッスンは一段と楽しかったぜ！」

「……………！」

「そうだな、指摘も的確でとても助かったな。」

「ええ、それにあの時の気遣いもありがとうございますね。」

「……！」

練習場から出てきたRASNとペパプらは最初とは違って和気藹々と並んでいたのであつた。

「ホント大助かりだわ…専属のコーチとかに任命したいぐらいよ？」

「……！！（ブルブル）」

「駄目ー？ジャパリまんあげるよー？」

「……。汗」

少しぎこちなさそうにしていたRASNも普通に笑えるようになり、彼女達らからパークの事やセルリアンやフレンズの事も知つたのであつた。

「おお！レッスンとやらは終わったみたいだな？」

「えっ？ヘラジカさん？」

すると六人の前にはヘラジカが頭に紙風船を付けていて待っていたのだった。

「何か用でしょうか？」

「うむ、用はあるな。そこの赤髪にな！」

「……!？」

そしてビシツと紙で丸めたような棒をRASNに向けたのだった。

「なっ何だあ?!」

「んー?」

「直球に言う。お前…私と戦え!」

「ええっ!?!」

「…!?!」

## ヘラジカと赤髪

「待ってくださいいきなりなんで!」

「ふむ…理由が必要か?」

「そりゃそうだろう!」

「そうだな…見てみた時からずっと戦ってみたかった、それではダメか?」

「…?!」

「何だよその理由はっ!」

「…RASNはどうなの?」

「…。」

プリンセスに問い掛けられたRASNは困った顔で頭を掻いたのだった。

「何、勝つても負けても特には何もしたりされたりすることはない。ただお前と戦ってみただ、ダメか?」

「……………」

真摯な視線を向けるヘラジカにRASNはコクリと頷いたのだった。

「RASN!」

「その返事を待ってたぞ！それじゃこっちでやるぞ！」

そうするとヘラジカはRASNの腕を掴んで引っ張り、PPPもそれに付いていった。そして到着したのはライブステージであった。

「カメレオン、準備を。」

「了解でござる、RASN殿これと…これを。」

「…？」

そしてカメレオンはRASNにへとヘラジカが持っている紙を丸めたような棒を渡し、頭にもヘラジカが付いている紙風船を付けたのだった。

「何だか面白い格好だよねー？」

「そうかもしれないが…大丈夫だろうか？」

付いていったPPPらは観客席にへと座って三人を見ており、隣にはハシビロコウやシロサイもいたのだった。

「じつ…。」

「RASNー！ロツクに決めろよなー！」

「むっ！ヘラジカ様ファイトですわ！」

「うむ！それではこれより始めるぞ、ルールはその頭の風船を割られたら負けだ！準備はいいか！」

「……！」

ヘラジカが棒を前に構えるのを見るとRASNは小さく頷いて同じ様に構えた。

「良い構えだ…カメレオン、合図を。」

「了解でござるよー。」

カメレオンは両者の間に立ち片手を上げたのだった。

「それでは…始めでござる！」

「うおおおおおおおおおおおお!!!」

「……!!!」

そして下ろされると共にヘラジカはRASNに向かって突進していき、RASNは驚きつつも立ち向かった。

「へえああ!!」

「……！」

詰め寄せた距離が狭まるとヘラジカはまず棒を降り下ろした、だがRASNはそれを見るとブレーキをかけて止まり棒を横に振り抜こうと構えたのだった。

「何っ!?!だがつー！」

「……!?!」

しかしヘラジカは頭を捻らせRASNの棒を受け止めて弾いたのだった。

「やはり中々にやるなあ……！それでこそだ！」

「……」

「だが……まだ全力ではないだろ？全力で向かって来い！」

「……………」

ヘラジカにそう言われRASNは唇と棒を握る指を締めたのだった。

「遠慮はするな！」

「……………、……！」

するとRASNは両手から片手にへと持ち替えた、そしてぷらんと垂らすとRASNは目を閉じたのだった。

「お昼寝ー？」

「いやそんな場合じゃないだろっ!？」

「精神統一でしようか……？」

「じつー……？」

観客席がガヤつく中、RASNの辺りには黒いオーラが巻き上げ始めた。

「ほう……！」

ヘラジカはそのオーラを見るとニヤリと笑った、そしてRASNは赤い髪が黒く染まっていたのだった。



「何なの?!」

「見た目が変わったでござる…!?」

「……………、…!!!」

皆が驚くなか閉じていた目を開いたRASNは黄色い瞳でヘラジカを見据えたのだった。

「…っ!?やるではないか!」

「…!!!」

そしてRASNは眼にも留まらぬ速さでヘラジカにへと近付き頭の風船目掛けて打ち込んだ、しかしヘラジカは頬を広げ腕を震わせながらもそれを受け止めた。

「…!!!」

「何っ…!?」

だがRASNは巻き上げていたオーラを自身の棒にへと集約させヘラジカの棒を斬り抜き、RASNはヘラジカの頭上を一回転したのだった。

「くっ…!」

ヘラジカはとっさに腕を前に構えたがRASNはドタンとステージに背を付けたのだった。

「おいつ…!?大丈夫かよ!」

するとPPPがステージにへと上がってRASNを囲んだのだった。

「……………、……！」

「…大丈夫みたいだわ…。」

「いたくないー？」

「良かったです…。」

「…ええつと…濟まないな上がってきてしまつて。」

「いや、いいさ。それよりも決着は着いたしな。」

ヘラジカはコウテイにへと折れた棒を見せたのだった。

「まさか負けるとは思わなかつたがな、それに思ったほどではなかつたしな…。」

「…？…思ったほど…？」

## 料理と再会

そしてそれからヘラジカからはまた辺りのパトロールをして、PPPとステージにて赤髪のリターンを待っていた。

「そろそろお昼かしらね、それじゃちよつと待ってなさいよ。」

「えっーまたジャパリまんかよー？」

「イワビーさん…それしかないから仕方ないですよ。」

「でもよー…あつ！そういう前にサーバルが料理を作りに来た時の材料の余りとかどうなってるんだ？」

「余り？たしかまだ残ってたような気がするけど…？もしかして…。」

「そーだぜ！俺達でも料理を作ろうぜ！六人合わさりやロックだぜ！」

「……。」

「……。」

「……。」

「……？」

「……？」

イワビーが腕を上げてそう言うのと三人が思い悩む顔をして残りの二人は首をかしげたのだった。

「イワビーさん……流石にやめて大人しくジャパリまんを食べましょう？」

「なんでだよー？」

「……何も言うな。」

「あつー！おいつー!?!」

するとイワビーはコウテイとジエーンに挟まれて拘束されたのであった。

「ははは……まあRASNも待っててちょうだい、今ジャパリまん取りに行くか……えっ!?!」

「……！」

立ち去ろうとするプリンセスを引き留めるようにその腕をRASNは掴んだのであった。

「……？……？……？」

「食材とか？あつちの方にあるけどもしかして……。」

「……！」

するとRASNはプリンセスの指差す方に歩き始めてプリンセスとフルルはそれに

ついていったのだった。

そして三人が到着したのは野外キッチンなのであった。

「……！」

早速中へと入るとRASNは辺りを物色し始め、フルルとプリンセスも遅れて入ってきたのだった。

「……？」

「あつ、食材ならそこにしまつて置いてあるけどもしかして……？」

「……………」

プリンセスの言つてることを聞きつつRASNは食材を吟味し鍋などの調理器具を取りだし並べており、二人はそれを口を開いて見ているだけしかなかったのだった。

「ねえプリンセス、何してるか分かる？」

「……あまり分からないけど……料理なのかしら？」

そうしてRASNは近くの手頃な石を洗つて鋭く磨いで即席の包丁にして食材を切り分けたり、木と木を擦りあわせて火を起こして鍋に火をかけたなりとしたのであった。

「すごいねー？」

「ええ……こんなにテキパキと……！」

二人がそれに見惚れている内に二個の鍋にはシチューが出来上がっており、ふんわりと辺りにいい香りが巡ったのだった。

「すごい！あつたかそー……！」

「これが料理……!?とても美味しそうね……！」

「…………！」

感心する二人を見てRASNは得意げに笑いながらも出来た鍋に蓋を落としてワゴンの様な物に木の皿等と共に乗せたのだった。

「ねえねえ、私が押していいかなー？」

「……！」

RASNは軽く承諾してキュルキュルとフルルがワゴンをステージがある方にへと歩を進め、RASNとプリンセスはその後ろを見つつ歩いていった。

「こんなに美味しそうなものまでありがとねRASN？」

「……！」

「本当、こうなるとここに置いておきたくもあるわね……、……ってどうしたのフルル？」

「……うん……なんでもないよ？」

「そう……？」

一行は一旦止まってしまったもののまた歩み始めたのであった。

だがそんな彼女ら達の後ろの方からガサツと音がして草むらからセルリアンが出てきたのだった。

「セルリアン!?! どうしてこんなところに!?!」

「…!!」

RASNは紙を棒状に丸めた物を構えて斬りかかるもののセルリアンは怖じ気ることなく、直撃を受けても弾きながら近づいてきたのだった。

「RASNここは一旦引きましょう! もう少してステージだからそこに行けば…!」  
「プリンセス…また囲まれてるよー。」

すると進む方からもセルリアンが四・五体が迫ってきており八方塞がりとなっていた。

「…!!」

「駄目よ! そんなことはさせないわよ…!!」

「…でも何でこんなにセルリアンが来るのー?」

「何でだろー…ねっ!」

すると前方のセルリアンがぱつかーんと弾けてそこには鬣のように広がるボリウムたつぷりな暗い金色の髪とピヨコンと出ている耳や尻尾が特徴の女の子が着地していたのであった。

「あなたは…ライオン!？」

「…!」

「とりあえずまー走っていきなよー、ここはやつとくしよ。」

するとその女の子の隣に迷彩模様の服を着て腹部は鍛えられており、湾曲した角を持つ褐色の子が立ちRASNの側にへと寄ったのだった。

「そんじゃ頼むよー?こつちも早めに済ますからさー。」

「了解っ!それじゃ早いところ行くぜ!」

「…!」

「分かったわ!」

そうしてどうにかRASNらはその場から撤退し、ライオンも程なくしてステージにて合流したのであった。

「いやー…ちよつと手間取っちゃったかなー?」

「あの、助かりましたありがとうございます。」

「いいっていいってー。ところでさ、そこの赤いのってRASNって名前?」

「…?!……………! (コクリ)」

不意にライオンと呼ばれている子から指差されRASNは驚きながらも頷いたのであった。



「やっぱカー見つかって良かったよー。おーいオリックスこっちこっちー！」

ライオンがその声を張り上げると白い髪の毛の頂点からチヨイチヨイと生える角のような触角をしたオリックスと呼ばれる子とその影に隠れてもう一人が近づいていた。

「……」

「船長っ……」

するとその一人がオリックスの影から出てRASNに駆け寄ってきており、RASNは驚きながらもカモメを受け止めたのだった。

「もしかして……RASNが言っていた仲間？」

「そーだね、まあともかく良かったね……んっ？」

ライオンはふとプリンセスの隣にいるフルルを見てキョトンとしたのであった。

少ししてからヘラジカ達やジエーン達も合流したのであった。

「おっ？何だかいいにおいだな！」

「そうですね、これは……料理ですか？」

「美味しそうだなあ！私達もいいか？」

「……！」

「忝ないでござる！わあ…美味しそうでござる…！」

そうしてやって来たフレンズ達もよそわれてる皿を取って食べ始めたのであった。

「ん？何をしてるんだライオン。」

「いやねー、なんか熱そうだから少し冷ましてんのよー。ふっー」

「少し持ちにくいですが…これは美味しいですわ！」

「それじゃそろそろ私達も食べましょうか？」

「……！」

各々美味しそうに食べており人数分よそい終えたRASNとカモメもシチューを取って食べ始めた。

「それにしても良かったです…こうやって船長と合流できて。」

「……！」

「えっ…船長もですか？それは…なんと言うか…。」

「……？」

「あつ！何でもありません?!それより…ユキムラさんとかエクルちゃんとかは一体何処に…?？」

「……。 (汗)」

「そうですね…でも個人的にはこのまま二人で……。わあ?!」

「…?!」

徐々に顔を赤らめていたカモメとRASNの間に割って入る様に来たのはフルルであつた。

「やつほーRASN、食べてる？」

「…?!」

「おつとと…いきなり誰でありますか?!」

「フルルだよー、あれー?あんまり食べてないのー?だったら…はいつ、あーん。」

するとフルルはRASNの持つ皿に置かれてるスプーンですくいながら取ってRASNにへとシチューを食べさせようとしていた。

「…?!」

「ええつ…?!」

RASNは勿論それを見せられてるカモメも驚いていたのであつた。

「食べないのー?」

「…。 (汗)」

「むっ…。だったら…!」

カモメは頬を少し膨らませると自分の持つ皿のスプーンを手にしたのであった。

「せつ…船長…！…あつ…あーん…です！」

「…!？」

二つのスプーンに迫られRASNNは困惑し身をズズツと退かしていたのであった。

そしてそんな様子をヘラジカとライオンは見ていたのであった。

「にぎやかでたのしそーだね？」

「そうだな、そういえばライオンよ。どうしてここにいたのが分かったんだ？」

「ん？ヘラジカのとこのヤマアラシが教えてくれたんだよねー、みすべちほーあたりに行ってくてさ。」

「おっと、そういえばそう言ってたか…。」

「それとさヘラジカ、もしかしてあのRASNNっての流れ星からやって来てたりしてた？」

「そうだったな、真夜中に光ってたから見に行ったが…もしや…。」

「そう、あの子も流れ星から。それだけでさ…セルリアンは？」

「ああ、まるで引き付けられてるかのようだった…特に夜中は…。」

「てことは何か特別なのかもねー、ん？」

するとライオンは上空を見た、するとそこには三つの影がステージにへと降り立ったのであった。

「いいにおいね…。」

「とーちやーくー！」

三つの影のうち一つは頭から羽のようなものに白と朱鷺色目を引くが女の子であり、あとの二人はエクルとユキムラであった。

「喫茶店だけじゃなくてステージまであるのか…？」

「あつ！あそこにRASNとカモメがいるよー！」

「そうだな…つて何してんだ!？」

「たのしそー！」

「何やら色々と来て…うおっ!？」

するとヘラジカらの背後から全速力でメグとイロメロが飛び出してきたのであった。

「やっぱり先に着いてたおー。」

「でもとても楽しかったですよー！」

「一気に賑やかだねー？」

「そうだな…。」

## 先輩と相談

そうしてRASNの方のドタバタも何とか収まりユキムラ達もシチューを食べてから、冒険家は一旦二ヶ所にへと集まり持てる情報を交換したのであった。

「……！」

「そうか、そつちも…。」

「メグたんもそんな感じて山の天辺だったおー、そのお陰でユキたん達に会えたおー。」

「……、ともかくまずはここからどうやって戻るかな…。」

「そうですね…早く戻らないと…。」

「…？」

「そうだよ！多分皆が心配早く戻るおー！」

「…！」

「…そういえばあの時はイロメロが描いたものが光ったからだだったな…同じものを描けたり出来ないか？」

「んむー…すみませんどうにも思い出せません…。」

「そうか…武器もルーンもない以上どうしたものかな…。」

「…。(汗)」

するとそこにペパプの面々らによく似た格好の女の子がやって来たのであった。

「どうしたのー？そんな悩んだ感じになっちゃって。」

「君は…？」

「アタシかいー？アタシはジャイアントペンギンのジャイアントだよーよろしくー。」

「…！」

ジャイアントはそう言いRASNにへとペンギンの羽のような手を差し出して握手をしたのであった。

「んで何か悩み事？私でよかったら乗ってあげるけど？」

「…！」

そうして冒険家達はジャイアントにへとこれまでの経緯やら現状とかこちらの世界の話をしたのであった。

「へえー、不思議な世界だね？そんなところなら一度は行ってみたいねー。」

「それでなんですが何か方法とかあったりするのでしょうか？」

「そうだねー、そっちの世界でルーン？ってのが色々と出来るけど無いんだよね…だつ

「たらサンドスターとかでならどうかなー?」

「サンドスター?」

「そつ、あそここの山から降ってくる不思議なものなんだー。」

「ジャイアントはそう言つて手を火口が虹色の結晶に枝状に生えてる山にへと指したのであつた。」

「おつー…前から気になってたおー…。」

「あのきらきらしたの全部がサンドスターつてのなの?」

「そうだよー、んでRASNくんだけルーンの光つてので色々できるからルーンの代わりにサンドスターでそれをやってみたらどうかなつて話なんだけどどうかなー?」

「成る程…良いかもしれないが、そもそもサンドスターというのは一体…?」

「まあ平たく言えば不思議なもの、ジャパリパークに色んな気候があつたりするのもアタシがこんな姿になつたのもサンドスターのおかげだしね。」

「ジャイアントはそう言いクレンとその場で一回回り灰色の長い髪を揺らしたのであつた。」

「ということはもしかしてこのパークにいる方々は…。」

「そつ。皆サンドスターのお陰でこんな姿なのさ、多分だけどね。んでどうだい?」



「そうだな…他に方法も見当たらないしやるしかないな…。」  
「…！」

「そうですね！でも武器も無いからセルリアンに襲われたりでもしたら…。」  
「それならね…おつ、そろそろ来ると思ったよー？」

するとジャイアントの所にへとキコキコ音とわっせわっせと言う声を鳴らしながら四輪自転車がやって来ており、中からは二人の女の子が出てきたのであった。

「ようやく見つけたのだ！」

「いやー疲れたねアライさん？おつと、見かけない顔がいつばいだねー？」

アライさんと呼ばれる見るからに活発そうな自信満々そうな表情をしな子はジャイアントにへと近付き、もう一方の大きい耳が特徴的な子はそのジト目でRASNらを見ていたのであった。

「やつほー、どうだったー？」

「そうだねー、私がバナナを食べてる時にアライさんが沼に沈んだりとかワニのフレンズ達に一杯遊ばれてたのさあ。」

「でもまんまるのぴっかぴっかのが見つからなかつたのだー！」

「ありやりや…そりや残念だったねー？」

「私は楽しかったけどね、ところでこつちの方々は誰ー？」

「そうだそうだ、まあ今現在困ってる感じでね……。」

ジャイアントはやって来た二人に事情を話したのだった。

「……てな感じなんだ。」

「ははあーん、アライさんは分かったー?」

「お任せなのだ!アライさんはバッチリでばーふえくとなのだ!」

「ほんとかなー?そうだ、私はフェネックでこつちがアライさんだよーよろしくー。」

「……!」

そうして冒険家達もアライさんとフェネックに自己紹介をしたのであった。

「それで二人に頼みたいことがあるんだけどね、この人らをあの火山まで護衛してほしいんだ。もしかしたら道中でまんまるいのが見つかるかもしれないしね。」

「それならば引き受けたのだ!アライさんの背中に着いて行くのだ!ふははは!!」

するとアライさんは火山の方ではなく白い雪山の方に走り出したのであった。

「ありやりやアライさんまたやつちやつてるねー、待つてよーそつちじゃないつてばアライさーん。」

そしてフェネックは慣れた足取りで全力疾走するアライさんを追いかけていったのであった。

「何だったんだ……?」

「でもとってもハツラツしてましたね！」

「ねえねえ、エクルもアライさん追っかけちゃダメ？」

「アライさんはフェネタンに任せておくお。」

「そんじやまあそんな感じだね、今向かったら夜になりそうだし明朝に出た方がいいかな？」

「まあそうだな、一応山を越えてやって来ていたからな……。」

「流石にメグたんもヘトヘトだから今日はゆつくりのんびりだお。」

「エクルちゃん！こっちになんか面白そうなのがありますよー?!」

「わーい！エクルも見に行くよー！」

四人が脱力する中エクルとイロメロは元氣よく辺りを探検しようと駆け出した、そして丁度ペパプやヘラジカやライオン達とすれ違い彼女らはこちらへとやって来た。

「あつ！ジャイアント先輩!？」

「やつほー、そういえば君達って割りと武闘派だったけ？あの二人だけじゃ心配だから頼みがあるんだけどー？」

そうしてジャイアントは火山に行くこと等をフレンズ面々に話した。

「成る程……それならば途中までの護衛は私達がしよう！」

「美味しい料理のお礼もしたいからねーまかせなよー。」

ライオンとヘラジカ自信満々と胸を張りそう告げた。

「そうなの…良いコーチとしてマーゲイに紹介したかったんだけどね…。」

「そうだな…料理も美味しかったから是非とも置いておきたいと思ったが仕方ないか。」

「少し寂しくなりますね…。」

「そうだなー…。」

「そうなんだ…。」

物悲しい雰囲気のパパのメンバーの中でフルルだけは頭を項垂らし小石を蹴つていたのであった。

「とりあえず出発は明日の朝ってことだねー。」

そうして日は沈んでいったのであった。

## お別れと変化

そして翌朝、みずべちほーの出入り口には冒険家達とヘラジカらが出発する準備を整えていたのであった。

「よし、準備は万全か？」

「こっち側はおつけーだよヘラジカはー？」

「ああ、万全だぞ。」

各々体を動かしたりフレンズ達は持っている武器を確認したりしており、そしてそれをペパプとジャイアントが見ていたのであった。

「ごめんねー、アタシらも付き合ってやりたいけどレッスンがあるからねー？」

「ええ……ほんと見送ることしか出来なくてごめんねRASN？」

「……」

「そこでもだがお土産にこんなのを用意したんだ、受け取ってほしい。」

冒険家らに渡されたのは大きな袋であり中にはジャパリまんが沢山入っていたのであった。

「わっー！なにこれおいしそー！」

「是非向こうに辿り着いたら他のお仲間さまと食べてくださいね?」

「……それじゃ私達はここまでね、頑張つてね!」

「……!」

そうしてペンギンらに見送られ火山の方にへと歩を進み始めたのであった。

「ロツクにいけよー!」

「無理しない程度に頑張りなよー?」

「無事に帰れることを祈りますね。」

「元気でなー!」

「………、……!」

皆が手を振る中フルルは一步前へと踏み込んでRASNの方にへと走つたのであった。

「……!?!」

「ハア……ハア……ごめんね止めたりしちやつて……。」

急に来たフルルにRASNは驚き足を止め、他の面々らは丁度曲がり角で見えていなかったのだった。

「……?」

「あのね……あのね……あげたいものがあるんだ……!」

そう言い取り出したのは手のひらに収まる大きさの楕円形な石なのであった。

「……………」

「…あの時も一緒に暖めていた大切な物なの…だからRASN君にあげるね…？」

「……………」

RASNはコクリと頷き差し出された手に手を重ねてその石を引き取ったのであった。

「大切にしてね？お願いだよ…？」

「……」

そうしてRASNは手を振りながら曲がり角を曲がって姿をくりましたのだった。

すると後ろの方からジャイアントがやって来たのであった。

「どうだった？」

「先輩…渡せたよ…。」

「そうかそうか…よく頑張ったけど…どうだい？」

ポンポンとフルルの肩を叩いたがフルルは首を横に振った。

「それじゃあ…適当に言い訳しとくから行ってきな？」

「…！ありがとう！」

そうしてフルルはRASNらを追いかけたのだった。

「…フルルも頑張んなよ。」

そう呟きジャイアントはフルルを見送ったのだった。

一行はそれからセルリアンとの遭遇を避けながら進んでおり、ようやく火山の麓まで来ていたのだった。

「それにしてもやっぱすごいねーお二人は、今日はまだセルリアンの影も見えないよー。」

「そんなことはないでござるよ…拙者なんかより飛べるハシビロ殿がすごいでござるよ。」

「そんな…照れちゃう…。」

現在は火山の麓にて一時休息中であつた。

「そんな謙遜しあわないでよー。ん、アライさん?」

「ぐぬぬ…アライさんでも停泊というのは出来るのだ!」



「偵察ね。」

「お前らはここで休んでるのだ！アライさんが見に行ってくるのだー！」

そうしてアライさんは立ち上がると駆け出していったのだった。

「あー、またかー。」

「大丈夫でござるかな…？」

「多分大丈夫だよー、お腹空いたら帰ってくるし危ないと思ったたら逃げ…ないかーアライさんなら。」

「だったら……。」

「いやいやーここはアタシに任せなよ、お二人はお疲れだからゆっくり休むといいよー。」

そう言いながら立ち上がるうとした二人を制してフェネックはアライさんが走っていった方に向かったのだった。

「……………大丈夫かな…………？」

そうして暫くするとアライさんとフェネックは戻ってきたのであった。

「やあやあ、ごめんねーアライさん突っ走りすぎて大きい岩に頭ぶつけてたみたいなんだよねー?」

「そうでござったか…。」

「…じつー…?」

「ふえっ…?!」

ハシビロコウはフェネックの裏にへと隠れているアライさんを不思議そうに見つめており、アライさんはそれに気付くと視線を合わせまいとフェネックの後ろにへと完全に隠れたのだった。

「…じいー…?」

「なんだかさつきとは全然違う気がするでござる…?」

「あー…それはねー…ほらさつき頭ぶつけて少し性格がおかしくなっちゃったんだよー、ね?アライさん。」

「えっ?!あつ…そつ、そうなのだ…!」

「…??」

「…??」

ハシビロコウとカメレオンはただ首を傾げることしか出来なかった、すると彼女らの所にRASNがやって来たのだった。

「…?」

「あつ、そろそろ行くでござるか?」

「分かった、今行くね…。」

「アライさん?」

「分かりまし…分かったのだ…!」

二人が歩く中アライさんは早歩きにてRASNの前にへとやって来たのだった。

「…?」

「……………、えいつ!」

「…うえつ!」

「…!」

そしてアライさんは何度か悩んでから意を決して一歩踏み込みRASNの手を握ったのだった。

「じっ…。」

「……………?」

「一体なんでござるか?」

「……………うっ…。」

暫くしんとしてからアライさんの顔が赤くなつてくるとフェネックが頭を掻きなが

ら近づいた。

「あー、えつとー…たしかキミがあこの山頂で不思議なことをするからその間アライさんが直接守る…だっけ、アライさん？」

「えつ…うんつ、そう…なのだ。」

「というわけでアライさんが守るなら私も一緒に守るのさあ、そういえば行かなくていいのー？」

「………！」

「そうでござったー！」

フェネットクに指摘され準備を終えて手を振る皆がいる所にへと足を急がせたのだつた。

## 山頂と光

休息が終わり一行は山を登り始めた、先程と同様にカメレオンとハシビロコウが辺りを偵察してヘラジカとライオンらが近辺の警戒を行っていた。しかしアライさんはRASNの腕に組み付きフェネットはそれを側にて見守っていた。

「なんだかさつきとは少し違うな…アライさんは。」

「そうですねー、何だがしんなりと言うか…しつとりとした感じですね。」

「遊ぼーって言ったのにRASNの影に隠れちゃうしねー。」

「それに歩き方もズイズイとじゃなくて船長の歩調に合わせてますね…。」

「カモメたん…なんか怖いおー?。」

冒険家らも今のアライさんの変化に眉を細めていた。

そしてそろそろ一行は山頂にそろそろたどり着きそうなのであった。

「もう少しか…?。」

「そうだな…ん?どうしたハシビロコウにカメレオン?。」

「大変なの………!。」

「そうでござる!いつの間にか大量のセルリアンに囲まれていたでござる!。」

「何だと?!」

「…!?!」

皆が驚くと同時に四方八方からセルリアンが湧き出るように現れ、前方には一面埋め尽くすかのように現れたのだった。

「もしかして待ち伏せですの…!?!」

「沢山いるわね…これを真正面から向かうのは無謀ね…。」

「ん…まあ大丈夫かなー?」

武器を持つフレレンズは武器を構えたがフェネックは辺りを見渡して小さく呟いたのだった。

「どうしたもんかなー、ヘラジカ?」

「こうなればまずはRASNを先に目的の場所に向かわせるしかないな…、道を作るために正面突破だ!」

「それならエクルがやるのー!」

するとエクルは大きく踏み込み背中の中を輝かせる、そして地面を蹴り飛び出すと体に風を纏わせて山頂の方に向かった。

「ー!」

セルリアンらはエクルの風に乗せられどんと吹き飛んでいき道が出来ていたの

であった。

「おお！中々やるな！」

「これなら少しは楽できそうかもね、さあ早く行きなよ？」

「分かった！行こう！」

「……！」

そうしてセルリアンの海から出来た道をヘラジカとライオンを先頭に冒険家は突き進み始めた。

「おっと、やっぱ来るよね！」

「おらあ！どきなー！」

「まきびしいっぱいの術ー！」

「サイサイサイサーイ！！おどきなさーい！」

「……んっ！」

そしてシロサイやオーロックスらは冒険家に迫るセルリアンを追い払い、RASNとアライさんにへと向かうセルリアンはフェネックが迎撃していた。

「よし、もう少しだな！全員気張れよ！」

「…………………？」

「うう……………」

セルリアンの海を抜けるとそのまま全力で駆け抜けて火口のサンドスターの結晶に到達したのだった。

「着いたねー、そんじゃよろしくー。」

「…!!」

「私達はセルリアン近付けないように暴れてくるか!」

「そうだねー、やっぱこっちに向かってくる…ねっ!」

ライオンは爪を出しヘラジカは武器を回しながら迫るセルリアンを蹴散らしており二人とも目を光らせていたのだった。

「RASNN! 早いところ試そう!」

「………?」

するとRASNNの腕からは震えが伝わってきており、アライさんの方を見ると体を震わせたかったのだった。

「ふえっ…?!………」

「…??」

そして見られていたのに気付くと顔を赤らめて手で隠したのであった

「RASNNさん! 早くやってみましようよー!」

「………」



「……っ!?…あっ…。」

RASNはアライさんの頭に一回手を乗せてからイロメロやユキムラの所へと向かった。

「それじゃさっそくおねがいするおー?」

「…!」

目を閉じて結晶に手を触れてRASNはルーンの光を光らす要領でソウルを流し込んだ。

「わー!びかびかー!」

「まっ眩しいですね…。」

「これで何か起こってくれ…!」

「あっ…!!」

光を浴びたイロメロが急に声を上げて膝を曲げて四つん這いになると紙を一枚取り出したのであった。

「どうしたんだ!?!」

「バビュンと思い出しましたよ!あの時描いていたものが!コーギュルンと巻いてグンツと来まして…、ピヨコンピヨコンで!出来ました!」

そして紙には「の」の字に耳が生えたような紋章が描かれていたのであった。

「…そうだ、この紋章だ！これを…うお!？」

「こつちも光ってるおー?!」

結晶からの光に負けじと紋章が輝き発された光から森林の景色が写し出されていたのだった。

「もしかしてこの先が私達の世界でしょうか…?」

「分からないな…。」

「うーん…エクルにもわかんないやー?」

「でしたら行ってみますね！とおー!」

「…!？」

イロメロはその光にへと飛び込むと姿を消したのであった。

「イロメロー!？」

「イロたんが消えたおー?!」

「どうしましょう…!」

「…?!」

皆が慌てふためく中、光が揺らぐとそこからイロメロが帰ってきたのだった。

「ただいまですよー!」

「無事だったのか?!」

「はいっ、それに出てから少し一周しまして見てきましたがちゃんと私達の世界でしたよー!」

「そうだったのか…。」

「そうだったらエクルは行ってくるねー!」

「あつ!待っおー?!」

「では私ももう一回…、そうだユキムラさんも一緒にびびよーん!!」

「ん なっ!?うおおおお!!」

そうしてRASNとカモメを残して冒険家らは飛び込んでいったのであった。

「船長…、私達も…!」

「おー、なんか成功したみたいだねー?良かったねえ。」

「……。」

するとパチパチと拍手するフェネックと顔を赤らめるアライさんが近づいていたのであった。

「……!」

「お礼かー。まあ私がみんなに言っておくけど…おっ?」

「フェネックうー!!ようやく見つけたのだー!!」

「うわっ…!?!」

すると下の方からアライさんが全力疾走でやって来てアライさんを弾き飛ばしたのだった。

「……!!?」

「ええっ!!?」

「ありがとうござ……ありがとうなの……だあああっー?!」

RASNはそれを受け止めはしたがそれはアライさんではない女の子であり、白と黒の髪色で目元はどこか頼りなげな印象の子で胸の前で右手を左手で隠していたのであった。

「これは一体……何が……?!」

「んん?アライさんがアライさんっぽいのにぶつかった気がしたけど、そいつは誰なのだ?」

「アライさん、それはタヌキだよー。なんでも変化か得意なんだってさあ。」

「……すると今まで一緒にいたアライさんは……タヌキちゃんということでしょうか?」

「そゆことだねー。」

「……!!?」

「ん?んん?どうということなのだフェネック?」

アライさんはあつけらんな顔を右往左往しながら頭に疑問符を並べまくっていたのであった。

「まあ後で説明するよアライさん、それじゃ後は頑張つてねー?」

「あつ……! フェネックさん……!?!」

「待つのだフェネックー!?!」

そうしてフェネックは手を振りながらセルリアンの所にへと向かいアライさんはそれに就いていったのだった。

「……あのー……あなたは どうしてアライさんの姿に化けていたのでしょうか?」

「それは……あの……」

カモメはタヌキにへと問いかけたが、タヌキは指をモジモジとさせていた。

「……………?」

「……その……実はなんと言うか……流れ星から来た時から気になって……それから影で何度も見て……何でかよく分からないけどあの時頭に手を乗せられたのは暖かくて……心が安らいで……あの……」

そしてタヌキは R A S N にへと頭を差し出したのであった。

「良かったらまた……手を置いて貰えませんか……?!」

「……!?!……………」

RASNはその頭に手を置くと優しく撫で回したのだった。

「あふう……これ……とても気持ちいいです……。」

「……………」

タヌキは恍惚の表情にてそれを享受しており、カモメはそれを下唇を少し引つ込めて見ていたのであった。

ちよつとしてからRASNの手はタヌキの頭から離れたのであった。

「あつ……。」

「……あつ。」

タヌキは少し残念そうな声と顔を上げたのだった。

「……………」

「あつ!? 船長?!」

「……………!?!」

すると紋章が放つ光がどんどんと弱くなっていたのであった。

「これは急がないと……! ええっ!?!」

「……!?!」

そしてカモメはRASNの手を握り引つ張ろうとしたそこにはセルリアンが一体二人に襲いかかってきたのだった。

「危ない……！えっ？」

タヌキが前に出ようとしたがそれを一つの影が追い越してセルリアンを突き飛ばしたのだった。

「……!？」

「はあ……はあ……追い付いたよ……。」

するとそこにはフルルがいたのだった。

「どうしてここに……？」

「……？」

「やっぱり……やっぱり……行っちゃうのは嫌だから一緒に行きたかったけど……。」

「……？」

「……うん……RASNはカモメに任せるよ……。」

「フルルさん……。」

「……？」

するとカモメは悲しげな目でフルルを見たがRASNは首をかしげたのだった

「……では……またいつか会えるといいですね……。」

「うん……またね？」

「……………、……!」

そうしてカモメはフルル敬礼をしてらを引つ張り光にへと突っ込んだのだった。  
「あっ……、……。」

フルルも一瞬その光に飛び込もうと近づいたが一步二歩手前にて足を止めた。  
「あっ……、……。」

そしてタヌキの発した空虚な声とともに光は収まってしまったのだった。

「……RASIN……さん……。」

タヌキは撫でられた頭に名残惜しそうに手を当てたのであった。



## 帰還とお祭り

「……!?!」

「きやあ……!?!」

RASNとカモメはドタンと尻餅を草原にへと着き、目の前にはユキムラ達が立っていたのであった。

「大丈夫か!?!」

「……!?!」

「私は平気です……ってこっちは夜なんですな……。」

そう言つて見上げると空には月と星がRASNらを淡く照らしていた、そんな中メグとユキムラはひっそりと話していたのであった。

「メグ、日時とかは分かつたりできるか?」

「んーと……ルーン時計は……まだ大丈夫だよ……。」

「そうか……それなら大丈夫だな……。みんな!取りあえずは下山してみないか?こんな時間だし多分みんな気にしていると思うしな。」

「そうですね!心配させてはいけませんからね!」

「メグたんも賛成だおー！」

「エクルもー！」

「船長は…？」

「…！（コクツ）」

「よし、それじゃ足元に気を付けていくか…。」

一行は手持ち品を確認して無くなっていた武器を装備し直してから下山した、道中は特にモンスターやお化けに襲われることもなくロツジにへと到着したのであった。

しかしやって来たロツジは中の明かりも付いておらずで人気も物音もしなかったのだった。

「真っ暗ですね…。」

「……………」

「中には…誰かいるのか？」

「おー…暗すぎだおー…。」

「わからないですねー、でもゾゾゾーな感じでお城がありそうですねー？」

「おしろー？ 井戸ならあるよー？」

エクルが指差す方には井戸がポツンと置かれており、そこには灯りが灯った提灯が置かれていた。

「明かりか…そういえば…そうか。」

「…?」

「RASN、良かったら取ってきてほしいお

…そうすれば辺りがよく見えると思うおー?」

「…!」

RASNは快く頷き井戸の方にへと近付いた、よく見ると井戸の回りには柳が植えられておりその葉は垂れていたのだった

「……………」

異様な雰囲気にながらも提灯にへと手を伸ばした、するとズサアと井戸から白い手がRASNの腕を捕まえたのだった。

「…………!」

「ぎにゃー!」

「…………?!」

RASNは驚いて尻餅をつくとき聞き馴染みのある声と共に井戸からキャトラが発射され、RASNは慌てて飛び出したキャトラを受け止めた。

そして腕の中のキャトラは何故か白い着物と三角巾を着けていたのだった。

「ふえー…驚かすと思ったら驚かされたわー…?」

「……？」

「この格好？まあお化けの島だから一度やってみたくてねーうらめしやー…カニカマおいてけー。」

「……。 (汗)」

「さてと…そろそろ良いかしらねー？」

「……？」

そう言つてキャトラは三角巾のみを取り外してからRASNの腕から降り、落ちている提灯を前脚で叩いた。

「……？」

「何してるかって？…まあ見てなさいよー？」

するとその提灯が上へと上つており、いつの間にか辺りにあつた垂れ柳も無くなつていたのだった。

「…?!」

「ライトあつーぷー！」

キャトラの号令と共に辺りが明るくなった、そしてその光源は先程キャトラが叩いていた提灯と同様の物がたくさん並びそしてそれらの下には暗幕が被された何か並んでいたのだった。

「そんじゃー！ やっちゃいなさーい!!」

そうして暗幕らは内側から一斉に全部剥がれ、中からは屋台が出てきて中にはRASNの顔馴染みの冒険家達の姿があつたのだった。

「……!?!」

「RASN…?」

「にーにー!」

「パパ……!」

RASNは名前を呼ばれて振り返るとそこには浴衣姿のアイリスとコヨミとヒナが立っており、アイリスの手には蠟燭が立ったケーキを持っていたのであった。

「みんな声張り上げなさーい！ せつーの!」

「「「誕生日おめでとうー!!」」」」

そしてアイリスが蠟燭に火を立てるとRASNの方にへと近づけたのだった。

「さあRASN、一気に吹き消してね?」

「……………、……………!!」

RASNは啞然としたもののアイリスの方にへと近付くと一息にてケーキ上の蠟燭の火を消したのであった。

「わっー!!」

「きゃー!!」

「めでたいわ! 踊るつきやないわ!」

「おめでとうございます……!」

「うおおお!! ワツシヨオオイ!!」

「おめでとうね…ケホツ…ケホツ…!」

「ケーキ…! じゆる………」

「今日はめいっばい誉めてやるよー! でもやっぱ俺も誉めてくれー!」

「おめでとねー。」

火が消えた後に辺りからは拍手と歓声や汽笛やら竜や獣達の咆哮が鳴り響いたのであった。

「……ぎにやああああ?! ちよつと開幕式みたいなのやるから少し黙らつしやあー!」

キャトラの叫声により辺りは静かとなり、RASNの頭にへとキャトラは移動するとアイリスによってルーインインカムマイクが付けられたのだった。

「あーあー、よしっ。それじゃドツキリも一応成功したし…今からRASNの誕生日を祝つちやう祭りを始めるわよー! 飲んで食って騒ぎまくるわよー! ぎにやー!!」

そうしてまた辺りは騒がしくなったのだった。

「ふうー…疲れたわー…。」

「お疲れ様キャトラ、はいお茶。RASNもいる？」

「ありがとねー。」

「……！」

アイリスは水筒を開きRASNとキャトラにへとお茶を差し出したのだった。するとRASNらのところへユキムラ達がやって来ていたのだった。

「おつ、ユキムラ達じゃない。お疲れ様ー、でもなんか随分と遅かったわねー？」

「ああ、少しトラブルがな…そうだ、誕生日おめでどうRASN。」

「おめでどうございますー！」

「おめでどうなのー！」

「だおー！」

「おめでどうございます！船長！」

「……！？？」

ジャパリパークを一緒に歩いた皆も浴衣姿であり、彼らからもお祝いの言葉を受け取るとキャトラにこの事を聞こうとしたのであった。

「ん？ああ、そういえばまだ説明してなかったわね。まあ簡単に言えば盛大な誕生日パーティーね、こっそりと盛大にするのにユキムラ達に手伝ってもらったわけよ。」

「……？」

「ああ、だがああなるとは全く思いもしなかったがな。」

「……！」

「……？まあ詳しいことは後で聞くとして……今はお祭りよー！食べまくりよー！！」

「そうですね！楽しんでいきましょー！」

「いっぱい遊ぶのー！」

そうしてキャトラとイロメロにエクルは元氣よく屋台の方にへと突っ込み、三つの溜め息と共に三人がそれらを追いかけたのであった。

「にーにー！お祭り一緒に回ろうよー！」

「ヒナ……パパと一緒にいいな……？」

「そうですね、四人で一緒に回りましょうか？」

そして残されたコヨミとヒナがそう言つてがそこに連ねるように赤い金魚が散りばめられた白い浴衣なカモメが入ってきた。

「……！」

もちろんRASNは頷くと四人で一緒に屋台を巡りにいったのだった。

「この林檎飴……中々美味しいですね！」

「……！」



「あむあむ…綿菓子も美味しいよ！カモメねーね！」

「…バナナおおい…。」

祭り囃子が響く中で四人は祭りを満喫していたのであった。

だが一旦ベンチにへとカモメとRASNは座ったのであった。

「大丈夫…パパ…？」

「……………！」

「少しはしやぎすぎましたね…二人は気にしないで遊びに行ってくださいね？」

「うん、分かったよ！行く、ヒナちゃん！」

「…またね…？」

そうしてベンチに二人が残され、二人は深く腰を落ち着いたのであった。

「…？」

「今日は色々とありましたからね…というかあつちでは三日ぐらいでしたけどこっちは数時間だったんですね。」

「…！」

カモメは林檎飴片手に微笑みながらもRASNと話していた、RASNからは多数の提灯からのほのかな灯りがカモメを照らしておりとても綺麗に見えていたのだった。

「はい…皆さんとても良い方ばかりでとても良い所でしたね。」

「……………」

「そうですね機会があったらこちらにへと招きたいですね。」

すると祭りの会場に轟音が響き渡り空には花火が咲いたのであった。

二人はベンチからその花火を見上げており、花火は丸いの以外にも星形やハートマークやキャトラの顔などが打ち上げられていたのであった。

「綺麗ですねー…。」

「……」

花火の中に人や大蛇のような影が映し出されたりしたが会場にいた冒険家は特に気にすることも無かったのであった。

「……………」

「……？」

そしてベンチの二人もそんなのを気にすることも無くカモメがRASNの目をじつーと見つめており、そんなRASNは首をかしげていたのであった。

「…。」

「……………」

「……………」

「……………」  
花火が打ち上がっている音の中、二人は静かに見つめあいお互いの顔には花火からの光が照っていたのであった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

だが先にカモメが顔を赤らめて視線をそらしてしまったのであった。

「……………」

そしてRASNは心配そうにカモメの方に体を寄せていき距離はもう体が触れ合っている範囲であり、カモメのおでこにへとRASNは手を置いたのであった。

「ええっ!?!だっ…大丈夫ですよ…。」

「…!?!」

カモメは置かれた手を驚き更に顔を紅潮とさせたのであった。

「…?」

「大丈夫ですよお…、あつ…でも…。」

「…?」

「その……多分ですけどキ……キキキ……」

「……??」

それでもじもと顔の前にて指を擦り付けて言葉を吃らせながらもRASNを見上げて、その赤い顔を近付かせていたのであった。

「キ……きつと……頭を撫でてくれたら落ち着く……かもです……」

「……。」

そう捻り出した言葉を発し、カモメは頭を下げたのであった。

「……！」

そしてRASNは迷うこともなくおでこに当てた手を頭にへと乗せると撫で始めたのであった。

「あっ……んんっ……！」

「……。(汗)」

カモメは撫でられるたびに小さく呻き体を締め込ませており、撫でるRASNは少し困っていたのであった。

「……あふう……。」

「…………！」

暫く撫でられ少し慣れたのかカモメは肩の力が抜け、紅潮とした顔も引いていたので

あつた。

「……？」

「はい、大丈夫です大分落ち着けました……。それにしても……やっぱり私、船長の事……あつ……。」

カモメが言い切る前に手は頭から離れてしまい言葉は途切れてしまったのであつた。

「あーにーにーねーねー！」

そして更にそこにへと星たぬきのお面を頭に着けてかいたコヨミとヒナがやって来たのであつた。

「……！」

「パパ見て……！これ……楽しいよ……！」

ヒナは手にしている水ヨーヨーを楽しそうにぽよんぽよんとさせてはしゃいでいたのであつた。

「あとね！見て見て！コヨミね射的でぬいぐるみさんを落とせたよ！すごいでしょ？」

そう言いコヨミはタローからお祭り衣装な星たぬきのぬいぐるみを受け取るとカモメとRASNに見せたのであつた。

「…！」

「はい！こんなに大きいのを落とせるとはすごいであります！」

「えへへ…：そういうええば向こうでみんなが集まってるよ？行ってみようよ！」

「一緒に行く…？」

「…？」

「そうですね、では…：全速前進です♪」

そうして四人は手を繋ぎ合おうと歩き始めたのだった。